

## 平成 28 年度 新入生オリエンテーション 学生部長訓話「大学生の在り方、生き方」 ～自己実現能力の育成をめざして～



去る、4月2日(土)の入学式は、晴天の春日和に恵まれ、乙女が池の満開の桜の花と共に新入生をお迎え致しました。翌週の4月4日(月)から6日(水)までの3日間は、オリエンテーション期間となっており、オリエンテーション初日の冒頭に上寺学生部長より「大学生の在り方、生き方」と題して以下の通り訓話がありました。

『大学生生活に臨むに当たって、姿勢を正し挨拶を行うことは礼節の証である。この場においては、頭を上げ、胸を張って、背筋を伸ばす。その状態を保つこと。起立、気をつけ、礼、着席と節度ある所作をまず指導されました。物事を師(先生)から学ぶ姿勢には、「体勢と心構え」の二つがあります。この事はこれからも意識して欲しい。皆さんは、大学生生活に際し、「春風を以て人に接し、秋霜を以て自ら肅む(佐藤一斎、言志後録第 33 条)」を心がけてください。加えて、Ⅰ. 志を立てること(立志=志向力)人は何のために生きるのかを自問自答しつつ、人生の目的を心に打ち立て、それを全身に浸透させること。Ⅱ. 己に克つこと(克己=自律)他者への思いやり、協調・協働の前提、規範意識の醸成、公共の精神の育成。私欲を制し、公欲に生きること。Ⅲ. 学ぶこと。自身の品性の陶冶、教養の啓培、実学の修得。自らを厳しい環境に置き、自らを鍛え、練り、磨き人間的成長を図ること』  
以上の熱いメッセージは、新入生の横顔から十分に届いたものと窺えました。(学生課)



### 佐藤一斎(儒学者)の名言

「春風(しゅんぷう)をもって人に接し、秋霜(しゅうそう)をもって自らをつつむ」

#### 【意味】

春の風のように温かい気持ちをもって人に接し、秋の霜のように厳しく自分を見つめよ。



### 佐藤一斎(さとういつさい)経歴(プロフィール)

1772 年～1859 年(安永元年～安政 6 年)江戸時代末期の儒学者。岩村藩家老佐藤信由の次男として、江戸浜町(中央区日本橋浜町)の藩邸下屋敷内で生まれた。儒学の大成者として公に認められ、1841 年(天保 12 年)に述斎が没したため、公儀の学問所昌平黌(しょうへいこう)の儒官(総長)を命じられ、広く崇められた。当然朱子学が専門だが、その広い見識は陽明学まで及び、学問仲間から尊敬をこめて『陽朱陰王』と呼ばれた。門下生は 3000 人と言われ、一斎から育った弟子として、山田方谷、佐久間象山、横井小楠等、いずれも幕末に活躍した人材たちがいる。同門の友人には松崎 慊堂(まつざき こうどう)がいる。将軍侍医の杉本宗春院とは極めて親しかった。88 歳で没

言志四録: 佐藤一斎が後半生の四十余年にわたり記した随想録。指導者のための指針の書とされ、西郷隆盛の終生の愛読書だった。今日まで長く読み継がれている。『言志録』、『言志後録』、『言志晩録』、『言志壺(てつ)録』の 4 書の総称である。

(名言格言集より抜粋)